

甕原離宮の位置について

中 谷 雅 治

1

『続日本紀』のなかで、「甕原離宮」の名が初めて見えるのは、和銅六年六月二十二日の条である。これ以降、同七年二月二十二日、霊龜元年三月一日、同年七月十日、神龜四年五月四日・五日、天平八年三月一日、同十一年三月二日・二十三日の条などに散見することが出来る。しかしながら、これは時には「甕原宮」と呼ばれたり、「三香原離宮」と書かれることもあった(万葉集)。

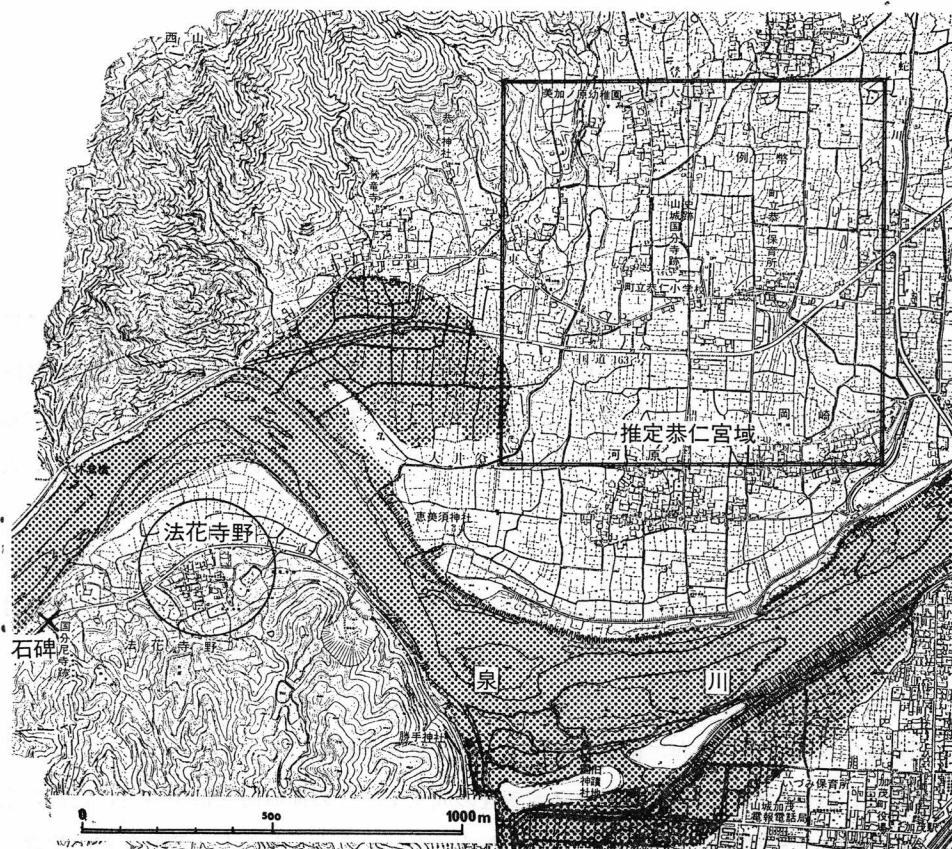
天平十二年十二月に、聖武天皇が恭仁の地に遷都を挙行してからは、翌十三年三月九日の条に、「使を遣して、平城宮の兵器を甕原宮に運ばしむ。」とある他に、天平十四年八月十三日の条に、「宮城以南の大路の西の頭と甕原宮以東との間に、大橋を造らしむ。」とある。そこで、こうした記事を見るかぎり、甕原離宮は恭仁宮に近接していて、しかも、宮の南西或いは西南西の方向に位置していたことが想像される。

恭仁宮の位置については、最近の発掘調査の成果や、その他の研究によって、現在の京都府相楽郡加茂町例幣を中心とした地域に特定されているが、しかし、甕原離宮の位置については、今一つ明確でない。

2

京都府相楽郡加茂町法花寺野小字西ノ平の地に、「甕原離宮国分尼寺遺跡参考地」の石碑が建てられている。ここは、大正十四年に行われた府道の敷設工事の際に多量の古瓦が発見され、やがて昭和2年に京都府史蹟勝地調査会によって発掘調査された土地で、現在は茶畑となっている。当時、発掘調査によって、瓦類とともに「土壁様遺蹟」が、約30間^(注1)(50m)にわたって発見された。土壁様遺構は、高さ約1.0m、幅約1.6m～3.0mの規模を有していて、これらは断続的に、7カ所にわたっていた。もっとも、これらがほぼ矩形状のものもある。そして、それらの構造は、平瓦類をいわゆる平積みにし、「瓦積み基壇」状を呈している。しかも、そうした遺構の側には漆喰が遺存していたり、また栗石が敷かれている部分があるなど、その様相は必ずしも一様とはいえない。

発掘調査者は、これを土壁の残骸であると考えた上で、これが宮殿或いは大寺院の周壁の一部と想定し、さらには、甕原離宮か或いは国分尼寺のそれである可能性のあることを指摘した。当地が「法花寺野」部落の西辺に近い所から、国分尼寺の存在が予測されたの



第1図 推定恭仁宮と法花寺野の位置関係

であろうし、恭仁宮が後に国分寺として再利用されたことから類推して、国分尼寺の前身が、甕原離宮である可能性の高いことを考えて、上の結論が導き出されたのであろう。

ところが、こうした一連の遺構が周壁であることを否定する意見が提出された。昭和13年に田中重久は、こうした「瓦積み遺構」が、瓦窯壁である可能性を説いた^(注2)。確かに報告書の写真を見るかぎり平窯のロストルの感を抱かせるし、さらには、これらが北西～南東の方向にあることも、宮や寺院の周壁とするには大きな疑問の一つである。なぜならば、当時の宮や寺院は、殆ど全てが南面しており、したがってその築地などは東～西或いは北～南の方向にあるのが常である。また、当地は恭仁宮の西南西に当たっているというものの、そのすぐ北側には泉川(現在の木津川)が流れているし、南側には丘陵が迫っている。したがって、離宮の立地にはあまり適しているとは言えない。さらに実際に現地に立って付近の景色を眺めてみると、対岸の山地が眼前にせまり、何のへんてつもない景色であることに気がつく。率直なところ、この土地は離宮の立地に極めて不適当と言わざるを得ない。

以上に触れたとおり、瓦が積まれた遺構の様子が、築地などの痕跡と考えるには、極め

て危険であるし、その方向もおおいに問題性がある。さらに、立地やその他の環境がきわめて不適当と言うこととなると、当地が、麩原離宮或いは国分尼寺の跡である可能性は、甚だ低いこととなる。そこで、当地以外にその可能性を求めるとすれば、果たしてどこに当たるのであろうか。

3

この問題性については、誰もが考えるところではあるが、今日まではっきりと取り上げられたことは無い。しかしながら、『続日本紀』天平十四年八月十三日条に見られる「宮城以南の大路の西の頭と麩原宮以東との間に、大橋を造らしむ。」の記事からすれば、いずれにしても、離宮が恭仁宮に近接していたであろうことは、容易に推察できるし、宮からの方向も、南西或いは西南西にあったものとする事ができる。先きの「土壁様遺蹟」の地も、まさに此の方向に当たっている。しかし、地形的に、また環境的により適した土地が近くに在る。上にも触れた「法花寺野」集落の地がそれである。ここは「土壁様遺蹟」地の東方約500mに位置しており、ここも恭仁宮の南西にある。しかも彼地より一層恭仁宮に近い。

恭仁宮に遷都された理由としては、当時の政治的・社会的背景からして、色いろな事柄が考えられるが、当地域一帯が非常に風光明媚であった点も、理由の一つであったであろう。『万葉集』に「山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ 帯ばせる 泉の川の 上つ瀬に 打橋わたし 淀瀬には 浮橋わたし あり通ひ 仕へまつらむ 万代までに」等と詠まれている通りである。したがって、麩原離宮もこうした自然的環境が魅力で設置されたのであろう。

恭仁宮の直ぐ南と西側は、泉川が曲折していて、川幅が大きく広がっており、したがって、当時は水の流れが淀んでいる場所があったり、水辺の草木が茂っていたりして、これらが周囲の山並と融けあって、自然的環境は非常に優れていたに違いない。そして、法花寺野の地は、こうした環境の一遇を占める位置に在るため、当然のことながら、離宮からの眺めも特別のものがあつたに違いない。反面、先きの「麩原離宮参考地」は、ここより若干なりとも離れた位置にあるため、そこからの眺望は、西方に突出した「法花寺野」の台地が目隠しとなって、ごく平凡なものであつたに違いない。

もっとも、「法花寺野」の集落のある地域(小字里)で、現在までに発掘調査が実施された例は無い。そのために直接離宮に係わる遺構や遺物等は、当地からは発見されている訳ではないが、この地域の地表面を注意深く観察すると、須恵器や土師器の細片を採集することが出来るし、過去には古瓦片が出土したこともあると聞く。特に、この地域一帯は地形的に非常に安定している上に、ちょうど離宮の設置に必要な範囲だけが、一段と高まっ

た地形にある。さらに、この地域の奥まった一角には小さな池が在って、これが「宮池」と呼ばれることもある点も、離宮の存在した可能性を示唆してくれている。この池が、離宮内の庭園池の名残と考えるのは、早計かも知れないが、いずれにしても、将来への検討課題とすることが出来る。

4

『続日本紀』等によると、恭仁宮の近くには甕原離宮の他に、岡田離宮と石原宮が在ったらしい。そして又、両宮ともに正確な位置は明らかではない。ところが、これら三つの宮に共通している事は、恭仁宮の時代以降には、文献上からその姿が消えることである。恭仁宮が後に山城国の国分寺として再利用されたことからして、同時代に建立されたであろう国分尼寺も、やはり近くの離宮などが再利用された可能性が頗る高い。そして、その可能性の最も高いのが、先きの「法花寺野」の地域であることは言うまでも無い。田中重久は「土壁様遺蹟」の性格を解釈するに当たって、これの所在する「法花寺野」の「法花(ホケ)」は、火気(ホケ)に通じるのであって、ここでは「瓦を焼いた所」と解した^(注3)。なるほど、当遺跡を瓦窯跡と考えることについては、筆者をはじめ多くの人達も賛成するところであろうが、「法花寺」の解釈については、必ずしもそうとは限らない。やはり「法花滅罪之寺」を意味していると解するのが自然であって、したがって、甕原離宮と国分尼寺とは、場所的に完全に一致すると考える方が妥当であろう。勿論のことながら、法花寺野小字西ノ平の遺構については、甕原離宮或いは国分尼寺の創建時、又は修理時の際に使用された「瓦窯」と考えるべきである。

以上の通り、現時点においては、甕原離宮の位置を特定するだけの決定的な資料や根拠を見出すことは出来ない。しかしながら、「参考地」と言っても多くの研究者が疑問を抱いている現実を無視することも出来ない。筆者が敢えてここにこの問題を取り上げたのは、近くの恭仁宮の研究が、発掘調査等の成果を踏まえて、着実に一步一步前進している反面、甕原離宮についてはあまりにも無関心とも感じられるために、日ごろ考えていることを敢えてここに記し、この問題性を提示することとした。必ずや近い将来に研究者の目が、「法花寺野」の地域に向けられ、発掘調査等の方法によって、離宮に係わる遺構の存否が明らかとなることを祈りたい。

(中谷雅治＝当センター調査課長)

注1 佐藤虎雄「法花寺野の遺跡」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11冊 昭和5年 京都)。

注2 田中重久「平安奠都前の寺趾と其の出土瓦」(『夢殿』18冊 昭和13年 奈良)。

注3 田中重久「平安奠都前の寺趾とその出土瓦」(『奈良朝以前寺院趾の研究』所収 昭和53年 京都)。